大塚敬節
矢数道明 責任編集

近世漢方医学書集成

110

多紀元堅 六

名著出版刊

南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成 110
多紀元堅(六)
第Ⅳ期 全16巻

昭和五十八年九月二十二日 発行

編者 大塚敬節
矢数道明

発行者 中村安孝

発行所 株式会社 名著出版
東京都文京区小石川三ノ十ノ五
電話東京(八一一五)一二七〇番(代)
振替口座 東京七一一〇七四九番

予約限定版

製版所 株式会社 日本写真製版社
印刷所 有限会社 伊藤印刷
製本所 辻本製本所

落丁本・乱丁本はお取替えします。

3347－1066－8324

責任編集

大塚敬節

矢数道明

編集委員

山田光胤

寺師睦宗

大塚恭男

矢数圭堂

松田邦夫

凡　例

一、本書第一一〇巻「多紀元堅(六)」には、『傷寒論述義』『金匱要略述義』を収録した。

一、本書は全て影印版によったが、影印にあたっては次のようにした。

イ、新たに柱と頁数を付した。

ロ、底本を縮少し、一頁に半丁ずつ収めた。

ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。

ニ、底本にある蔵書印及び書き込みは省略した。

ホ、印刷不明な箇所は、他の版本等により補正したところもある。

一、底本は次の通りである。

『傷寒論述義』　版本　（天保十五年版）　五巻二冊（矢数道明所蔵）

『金匱要略述義』　版本　（嘉永七年版）　三巻二冊（大塚恭男所蔵）

一、解題は矢数道明（北里研究所附属東洋医学総合研究所所長）が執筆した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

解　題

矢数道明

『傷寒論述義』　五巻二冊　多紀元堅著

天保癸卯十四年（一八四三）刊、存誠薬室叢書

従来の傷寒論の注釈書を見ると、私見が多く定論がない。そこで元簡は四十余部の中国の注家の説を取捨選択して『傷寒論輯義』十巻を著した。元堅は幼い頃からその講義をうけたがよく判らなかった。長ずるに及んで改めて輯義を熟読頑味してみると、いろいろの疑問の点があり、注解の足りない所が次々と目についてきた。そこで諸書を調べ、長年かかって、その疑問点や不足の所を補い、自らの注釈を加えてみると、かなりの草稿となった。そこで子弟後進のために、これを一書にまとめ、『傷寒論述義』として出版することにした。全五巻であるが、これを二冊に収めた。

巻一は、叙述、陰陽総述

巻二は、三陰三陽
巻三は、合病併病、温病風湿
巻四は、壊病、兼変諸証
巻五は、藿乱、差後労復
附録として十八項目に亘って、問答形式で判り易く、尚お足らざるところを補足し、さらにその後に気付いたところを追補した。

元簡の『傷寒論輯義』は、中国で著わされた有名な著述より、広く引用し、自己の見解をはっきりと打ち出していない憾みがあると評されているが、独断が少なく穏健で名著たるに恥じない大著であることは、何人もこれを認めている。元堅はその足らざるを補い、中西惟忠(深斎)、山田正珍ら日本の注家の説も加え、自らの意見をまとめている。「存誠薬室」は元堅の薬室名である。

『金匱要略述義』 三巻一冊　多紀元堅著
嘉永甲寅七年（一八五四）刊、存誠薬室叢書

『傷寒論述義』を刊行してから十一年後に、同じ形式で本書を出版した。この書も父元簡の『金匱要略輯義』の補正を行ったものである。その序文の中で元堅は、「不肖は金匱要略輯義を読むことすでに久しい。その間自らの管見もあり、また諸家の方論、経旨を拡充し、さらに偶々(たまたま)記載に

漏れたところなどもあるので、それらをまとめて一本とし、子弟や後進のため上梓した」と述べている。

大塚敬節氏の『金匱要略講話』によると、金匱要略の伝本には三つある。即ち、

(1) 趙開美刊本（仲景全書に収録）

(2) 兪子木刊本（明の無名氏仿宋本）

(3) 徐鎔本（医統正脈に収録）

元簡は、徐鎔本を善本として『金匱要略輯義』の底本とした。喜多村直寛も『金匱要略疏義』を底本としてこれに拠った。しかし渋江抽斎と森立之の著『経籍訪古志』では、徐鎔本は誤字が多く、趙開美本の方がよいといっている。元堅は趙開美刊本の原刻を得て、輯義の誤りを訂正したと題辞で述べている。

このようにして元堅は、引証該博、考証精微、輯義の誤りを訂し、その不足を補っている。多紀考証学派の面目躍如たるものがある。大塚敬節氏の『金匱要略講話』は、元堅の門人豊田亮の校正した『新校金匱要略』を底本としたという。大塚氏の調査によると、兪子木刊本は、目次も薬方名も間違いだらけであるといっている。

元堅は本書で中国における諸注家の説に加えて、日本諸注家として、兄の多紀元胤、門人稲葉元熙、辻元崧庵、さらに和田泰純らの説を引用し、〔叙述〕として自家の見解を述べている。

『**薬治通義**』　十二巻五冊　多紀元堅著

天保己亥十年（一八三九）刊、存誠薬室叢書

元堅はその序文の中で「医に大法あり、病の変たる端倪すべからず、則ち当さに大法に就いて、法外の法を求むべし」「診視法あり、証を弁ずる法あり、鍼灸法あり、薬を用うる法あり」「而して薬を用うる一法、実に緊要と為す、前賢論ずる所、頗る泛失多く、且つ纂本無し」といって、深くこれを慨嘆し、家蔵の書籍を博く採り、討究参審して、その精切なるものを掇って十二巻とし、『薬治通義』と名付けて出版することにしたと述べている。

第一巻をみると「用薬偏執すること勿れ」「用薬四時の弁あり」「用薬方土の宜あり」「用薬貧賤之別あり」「老人用薬の法」「小児用薬の法」「婦人用薬の法」「傷寒雑病治法の異」の八項目を掲げ、それぞれ中国古医書より、その優れた諸説をとって縷説詳解し、終りに「元堅按ずるに」として諸家の説を批判し、自家の意見を述べている。まことに懇切妥当を極めた記述法である。

第二巻以後、本治法、標治法、緩急軽重の治法、先後、虚実、補瀉、反治等に及び、汗・吐・下・和・温の五法、補法・清法・湿法・渋法・鎮法の大旨を述べ、湯・散・丸・膏・酒醴・薫蒸・浴洗法・導法、さらに薬性・気味・引経報使・煎法・服法等、苟くも薬治に関する重要諸項目、全巻合せて一〇六項に亘って細大漏らさず摘録、まさに薬治に関する集大成というべきである。

これこそ日本を代表する「薬治通義」として、先頃台湾の出版社より本書を復刻出版の希望が

筆者の許に寄せられてきた。

（注） 多紀元堅の小伝、事績等については本集成48巻の「多紀元堅(一)」に記してあるので、一読されたい。

多紀元堅

㈥

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

目　次

凡　例……五
解　題……矢数道明……七
傷寒論述義
題辞……五
目録……七
巻第一……一一
叙述……一一　陰陽総述……一七
巻第二……三一
述太陽病……三一　述太陽病……四五
述陽明病……五五　述太陰病……六四
述少陰病……七〇　述厥陰病……八一
巻第三……八九
述合病併病……八九　述温病風温……九五
巻第四……一〇五
述壊病……一〇五

述兼変諸證……一〇七
虚乏……一〇八　熱鬱……一一三　飲邪博聚……一一三
飲邪併結……一一四　血熱瘀血……一一五　熱入血室……一一五
風湿……一一七　湿熱寒湿……一一九
巻第五……一一六三
述霍乱……一一六三　述差後労復……一一六七
附・答問……一一七〇
傷寒論述義補……二〇五
跋……二一三

金匱要略述義

題辞……二三三
巻上……二三五
臓腑経路先後病脈証第一……二三五
痙湿暍病脈証第二……二四九
百合狐惑陰陽毒病証治第三……二七二
瘧病脈証併治第四……二七九
中風歴節病脈証併治第五……二八七

血痺虚労病脈証併治第六……二九七
肺痿肺癰咳嗽上気病脈証治第七……三一八
奔豚気病脈証治第八……三三一
胸痺心痛短気病脈証治第九……三三三
腹満寒疝宿食病脈証治第十……三四〇
巻中……三五七
五臓風寒積聚病脈証併治第十一……三五七
痰飲咳嗽病脈証併治第十二……三六七
消渴小便利淋病脈証併治第十三……三九〇
水気病脈証併治第十四……三九三
黄疸病脈証併治第十五……四一三
驚悸吐衄下血胸満瘀血病脈証治第十六……四二八
嘔吐噦下利病脈証治第十七……四三七
瘡癰腸癰浸淫病脈証併治第十八……四五六
趺蹶手指臂腫転筋陰狐疝蚘虫病脈証治第十九……四五九
巻下……四六三
婦人妊娠病脈証併治第二十……四六三
婦人産後病脈証治第二十一……四七一

婦人雑病脈証併治第二十二……四七八
雑療方第二十三……四八八
禽獸魚虫禁忌併治第二十四……四九三
果実菜穀禁忌併治第二十五……四九八
跋……五〇三

傷寒論述義

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c